

第34回福井県教育総合研究所研究発表会報告

明日の福井を拓く ～子どもの「主体的な学びを」を支える教師力～

1 開催日時 令和2年2月14日（金）10:00～16:20

2 会場 教育総合研究所および自治研修所

3 参加人数 267名

4 発表数 研究発表 17（内 所員によるもの 4）
ポスターセッション 14（内 所員によるもの 9）

5 今回の特徴

① テーマ性を持った研究発表の場とした。

子どもたちの「主体的な学び」には、安全で安心な学級づくりが不可欠であるため、教育総合研究所の特別研究の大きな柱としている「持続可能な幸福を育む学校づくりの研究」に関する発表を一貫して行った。

研究発表 午前の部 ピサポート活動を意識した授業・行事の実践

午後の部 ポジティブな学級づくり～「強み」をいかして

ポスターセッション 学校サポートプログラム普及のための実践研究

福井県におけるポジティブ教育の実践

チーム支援の在り方について

講演会 「持続可能な幸福（well-being）を育む学校づくり」

立命館大学教職大学院教授 菱田 準子 氏

② ポスターセッション

ポスターセッションの回数を3回とし、映像等を使用した発表形式も導入。

映像を使用した発表 小学校におけるプログラミング教育について

缶サットを用いたプロジェクト型学習の実践

③ 研究発表における参加者との意見交換を重視した。

研究発表において意見交換の時間を20分間設定した。

研究発表においてグループ討議を導入した。

6 概要 別添のとおり

① ア 豊かな感性を育てる教育

～細呂木小「朝鑑賞」の挑戦～

牧井 正人 / 細呂木小学校

【報告】 参加人数 15名

全校で行う「朝鑑賞」について、実践の内容や児童・教師の変容が紹介された。

細呂木小学校では、目指す児童像「かんじる子」「つたえる子」「うけとめる子」を掲げ、鑑賞活動を通して、主体的に学び、仲間と対話し、深く学ぼうとする姿を目指している。「朝鑑賞」の学びが、「考える力」「伝える力」等を育み、他教科や道徳への学びへとつながることを期待して、全校で行っている。



◆「朝鑑賞」について

- ・週に1回(毎週金曜日)15分間実施する。
- ・学年に応じた鑑賞材料を吟味する。
(図画工作科のアートカードの活用が有効)
- ・見えること、思うことを共有できるあたたかい雰囲気の中で学級づくりにつなげる。
- ・全校児童・職員でねらいを共有する。
- ・学級全体、グループ、ペア等の形態を工夫する。



◆児童・教師の変容

- ・全員が発言できるようになり、考えを共有し受け止める学級の環境が整ってきた。
- ・初の試みに対して教師の戸惑いが大きかったが、朝鑑賞を学級経営に生かしたり、他教科等との学びと関連させたりするなど、意識が高くなってきた。

参加者も「鑑賞」を行い、一枚の絵を多面的に捉える面白さや、異なる考えをもとに自分の考えを広げる楽しさを感じていたようだった。

【参加者の声】

- ・牧井先生の取組みに感激し、努力に敬意を払いたいです。
- ・牧井先生の「見るところから個性がある」という言葉から、多様性を認める方法や視点は、いろいろあるのだと感じました。遊びの中に学びを見つける視点のアンテナを高くしたいと思います。
- ・朝鑑賞についての取組みを学びました。子どもが安心して自分の想いを伝えることの大切さを実感しました。朝鑑賞は、その土台となる学級づくりのために有意義であると感じました。私も、4月からやってみたいなと思いました。
- ・朝鑑賞の実践が、図工の力だけでなく、言語の能力や理科の学習につながるという話で大変勉強になりました。

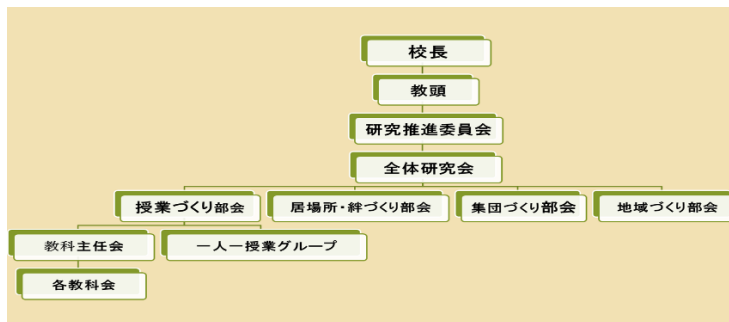
① イ

協働的・組織的な 校内研究を目指して

前田 朋子 / 明倫中学校

【報告】 参加人数 18名

昨年11月30日に開催した「主体的・対話的で深い学び」研究発表会に向けての明倫中学校の研究体制と、研究主任として意識して取り組んできたことを発表された。



① 組織作り

各部会・グループなどのメンバー構成を工夫（年齢毎、教科毎、教科を越えたメンバー構成）することによって、議論を活発化したり、生徒目線での授業づくりができるなどの効果が見られた。

② 授業作り

「授業者打ち合わせ会」を実施した。授業者の授業づくりの勉強につなげ、「指導案検討会」の設定を依頼して指導案検討時間を確保し、プレ授業も実施した。

【参加者の声】

- ・「全体研究会」や「一人一授業」の取組みでは、教科を超えたグループ編成によって、生徒目線で授業作りに取り組んでいる点が素晴らしいです。
- ・研究主任として、全員の先生方が参加する、考えるような取組みをすることが、協働的・組織的な校内研究につながっていると感じました。
- ・働き方改革との関係で、「研究」と「負担感」のバランスをとるのは容易ではないと感じました。
- ・PTAが研究発表会当日の運営（受付・駐車場・昼食）に参加していたのは素晴らしいと思いました。

① ウ

高校における通級指導の現状

～卒業後の自立に向けた支援とその取り組み～

高等学校サポート通級グループ

福田 洋香 / 奥越特別支援学校

石津 麻美 / 福井東特別支援学校

【報告】 参加人数 13名

2018年度より高等学校においても通級指導が開始された。福井県は6校でスタートし、指定された特別支援学校の教員が該当生徒の在籍する高校を巡回して指導する、全国的にも大変珍しい形態をとっているとのことである。

特別なニーズのある生徒たちがより豊かな学びを獲得するために制度として位置づけられた高校の通級指導について、福井県の現状や課題を本年度の取組みも含めて以下、(1)から(3)の流れで発表した。

(1) 「通級による指導」導入の概要について

- ① 対象生徒、通級指導上の留意点
- ② 福井県における通級指導の概要
- ③ 教育課程の位置づけと課題

(2) 通級指導の実践

- ① 集団生活への適応に向けた支援
 - ・ 集団によるコミュニケーション (S S T)
 - ・ トラブル回避に向けた取り組み
 - ・ 特性に応じた個別支援
- ② 社会的自立に向けた就労支援
 - ・ 各学校における実践と外部支援機関との連携
- ③ 他県「高校通級」先進校への視察
 - ・ 校内支援体制や指導方法について

(3) 高校通級の課題と今後の展望

今後ますます特別なニーズのある生徒たちが増え、支援の内容も多様になると考えられており、生徒の困り感を共感的に受け止め、特性に対する自己認識や問題解決への方策を一緒に考えると共に、今後も各学校と協働した授業実践や支援を進めていくとのことであった。



【参加者の声】

- ・ 高校の通級による指導がどのように進められているのかを知りたくて参加させていただきました。県と特別支援学校、高校の役割や具体的な指導内容について学ぶことができました。
- ・ 高校における通級について詳しく知ることができました。中学校現場での理解はまだまだ進んでいないので、伝えていきたいと思います。本人参加の支援会議の大切さが伝わりました。
- ・ 安心して高校の学習に向かえるのではと思います。通級指導には、本人、保護者、関係職員らとの連携が不可欠ですが、人員やお金の面での配慮が必要だろうなということが気になりました。

① Ⅰ

ピア・サポート活動を

意識した授業(音楽)・行事の実践

橋本 一恵 / 坂井中学校

【報告】 参加人数 12名

「安心して、楽しく歌える雰囲気をつくる」を目指して、音楽の授業や学校行事を通してピア・サポート活動の実践に取り組んだ発表であった。音楽の授業では、導入にアイスブレイクを取り入れ、お互いにかかわるきっかけを意図的に作っており、生徒達が生き生きと楽しく歌を歌ったり、活動したりしている場面を映像で紹介されていた。琴のペア学習では、教師がピア・サポート活動を意識した言葉かけや問いをすることで、自然とサポートする行動を取ったり、生徒自らサポートの良さに気づいたりする姿も見られた。行事では、生徒に動を意識させることが大切であると考え、担任と連携を取りながら、サポート活動を取り入れていた。また、生徒の考えや想いを伝え合う場を設け、支え合う気持ちを生徒一人ひとりが意識することで学級の絆が深まり、クラスの一体感が育まれていた。ピア・サポート活動を計画的に意図的に音楽の授業や行事に取り入れることで、安心して楽しく歌える雰囲気作りにつながっていた実践の紹介であった。

助言者の菱田先生からは、「生徒同士がつながろうとする意識や、人に認められたいという思いをうまく引き出している。心や想いが活動を成り立たせる。」と評されていた。



【参加者の声】

- ・生徒がとてものにこやかに授業に取り組んでいるのが素敵だと思いました。続けて取り入れることで、生徒たちも安心して参加できるので続けることの大切さを改めて感じました。
- ・ピア・サポートの実践を音楽の授業に取り入れることで、生徒が楽しそうに生き生きと歌を歌っていてすごいと思いました。安心感を持った授業や雰囲気の中で、のびのびと楽しそうにしているので、ピア・サポートってすごいなと思いました。
- ・どれだけ素晴らしい教科をしても、人と人とのつながりがギクシャクしたら、成果はあがないと思います。教科指導においてもピア・サポート活動に必要なスキルの勉強をしていく必要性を感じた発表でした。
- ・音楽科の教諭として、生徒の実態から「安全に楽しく歌える授業」を目指し、ピア・サポートを効果的に取り入れた実践研究から、多くのものを学ばせていただきました。導入場面での子どもの姿、プランニングの実際、子ども同士の関わりから、生徒に親和的な関係が築かれていく過程が大変参考になりました。
- ・とても興味が持てたし、心から音楽のピア・サポートのよさを感じることができました。橋本先生の思いが心から伝わる素晴らしい発表でした。来て良かったと思います。菱田先生のご講評をうかがえてよかったです。

① 才

羽水高校PBLの現状と課題

松田 一巳 /羽水高校

【報告】 参加人数 11名

羽水高校は今年度からI S N事務局という部署が教務部から独立し、単独の部署として活動を始めた。I S N事務局は特に総合的な学習（探究）の時間を運営し、本年度作成された羽水高校の教育目標であるUSUI7（うすいセブン）の達成を目指している。

羽水高校の総合的な学習（探究）の時間では「課題解決型学習（PBL）」を行っており、1年生では地域の課題を見つけその課題の解決策を市役所に提案する活動、2年生は自分の学びたい学問分野の探究活動を市役所や大学と連携しながら行っている。

活動は軌道に乗っている面もあるが、市役所からは学習のための学習となってしまう、何のために活動を行っているかわかりにくいという声が出たり、生徒からは1年生と2年生では活動が異なるため継続性がないという声が出たりするなど、活動の課題も浮き彫りとなっている。

こういった羽水高校の活動の諸課題について松田先生が問題提起されたことを、発表会の後半では参加者全員のグループワークによって意見交換した。グループワークでは「継続した取り組み」や「評価について」など様々な意見が出されて、羽水高校以外にPBLに取り組んでいる学校にとっても大きなヒントとなった。



【参加者の声】

- ・高校の取り組みについての発表ではありましたが、中学校の総合的な学習の時間を担当している身としては、より高度に学びを実感できる総合学習の在り方として新鮮に感じました。
- ・羽水高校の方針として1年をかけて課題設定を行うと聞いて、生徒に地域の現状を認識させて問いを立てさせる重要性を改めて感じる事ができました。
- ・持続可能なPBLのために根幹となる概念を教員間で改めて共有、考察していきたいと感じました。

① 力

学校に寄り添った SASA を 目指して

ハウカ 佐由里 栗原 忍 谷川 美紀
／教育総合研究所

【報告】 参加人数 11名

今年度、SASA は大きく変わった。「子どもたちが調査後すぐに自分の解答を振り返ることができていない」「問題量が多く、最後の問題まで解くことができない」「採点入力負担が大きい」等、学校現場にいた研究員の声が今年度の SASA 改革の発端となった。

それらを踏まえて、今年度は「自己評価の導入」「採点入力の業務委託」等、多くのことを変更し、実現できた。

発表では、「学校に寄り添った SASA を目指して」を合言葉に小中学校教科研究課がどのような思いで、どんなことに取り組み、調査問題等を作成してきたかについて紹介した。

以下が発表の流れである。

- ・ SASA の内容・特徴について
- ・ 調査問題に関すること
- ・ 調査を終えて見えてきたこと
- ・ 取組みを通しての結果について

発表には県外から派遣で来ている先生方にたくさん参加していただき、SASA に対する意見をたくさんいただいた。それを受けて、今回の改革が意味のあるものであったと自信をもつことができた。



【参加者の声】

- ・ SASA にかかる思いや、先生・子供たちのために作っていることを再認識させられました。郷土に関する問題を取り入れていることがとても印象深く、良い取組みだと思えます。
- ・ 今年度、教科を学年で横持ちしているため、SASA の採点に携わりませんでした。しかし、この発表を聞いて、いい問題が多いことが改めて分かったので、学校内で共有し、活用していけるようにしていきたいと思えます。
- ・ 郷土に関する問題は、今求められている力を図るのにとってもよい問題だと思います。また、記述式で問われていた問題を見直し、選択式にして、つまずきが見える化したことはよいと思えます。自己評価の導入もいい取組みだと感じます。調査だけに限らず、単元の期末テストでも取り入れていけそうだと思います。先生への採点支援もよく、採点の重要性を若手に伝えていくこともよいと感じました。
- ・ 自己採点の導入により、なぜこの時期に SASA があるのか、その意味が分かりました。ただ負担感はありません。しかし、この発表で伝えていただいた SASA の意図等を県内の先生にもっと広めていくと、理解が深まると思えます。



① キ

サイエンスラボにおける 生物分野の活動について

上中 一司 / 教育総合研究所

【報告】 参加人数 10人

教育総合研究所のサイエンスラボでは、物理・地学、化学、生物の実験室を使い、小学校から高校生のすべての校種を対象に、観察・実験を中心とした講座を実施している。今回は、生物分野における高校生対象の実験講座について、次の2つの取組みを中心に紹介した。

(1) 京大講座～iPS細胞を見てみよう～

最前線で活躍する研究者から直接指導を受け、最先端の研究に触れることを目的とした講座。京都大学 iPS 細胞研究所と連携し、同研究所から講師を迎え、iPS 細胞から分化した細胞を観察して下記の課題について考えた。

課題1 「何の細胞に分化したのか、理由を示して説明しよう」

課題2 「iPS 細胞は何にでもなれることは、どのように証明したらよいか」

(2) アドバンス実験講座

観察・実験を通して、実験技能の向上とともに、科学的な思考力を高めることを目的とし、年5回、大学の基礎実験レベルの実験講座を開催している。

<平成30年度の内容>

- ・細胞分画法と細胞小器官の観察
- ・プロトプラストの作成
- ・酵母菌の呼吸を科学する
- ・大腸菌の遺伝子組み換え
- ・フィンガープリンティング

参加された若い先生方から講座設計の視点や工夫点などについて多くの質問があり、発表終了後も、講座での活動に用いた参加生徒の意見が書かれた付箋を見ながら、各学校の現状や探究活動の取組み方などについて活発に議論していた。



【参加者の声】

- ・サイエンスラボにおける実践の報告から、探究活動に必要な力を伸ばす取り組みのヒントを多くいただくことができました。
- ・本当の科学とは何かについて学ぶという理科の本質に立ち帰ることができました。
- ・教師側も、課題が目的に対して合っているのか見極める力が必要と感じました。生徒にとって、「見方・考え方」を学ぶことは単に知識を学ぶより価値があると思います。

① ク

小学校における学校マネジメント

～学校組織マネジメントにむけた

カリキュラム・マネジメントの実践～

小島 真弓 / 教育総合研究所

【報告】 参加人数 23名

「チーム学校」、「社会に開かれた教育課程」の実現のために、今学校に求められる「学校マネジメント」。小学校に勤務するマネジメント研修受講者が、マネジメントの視点で学校の実態をつかみ、自分の校務分掌上でできる具体的実践プランを立案し、実践してきた成果を発表した。集合型・通信型・遠隔型研修を学校現場の実践につなげた実践型研修の有効性を提案した。

＜受講者による実践プランの発表＞

「チーム6年」形成へのマネジメント

木田小学校 教諭 櫻井 豊

学校をリードする立場である6年生の学年団について、「ひと」「もの」「かね」「情報」「時間」をマネジメントすることで、長期的視野で子どもたちを協働で育てるための「チーム6年」を形成した。また、木田地区や福井に対する誇りや愛着を感じ、自分の将来につなげるためのカリキュラム・マネジメントをした。



「特別支援教育の充実と校内OJTの推進による

チーム力の向上」

武生南小学校 教諭 翹 かおり

「共生を目指したあたたかい人間関係作り」と掲げている学校教育目標を、教務主任および特別支援教育コーディネーターという立場で、児童、教員、保護者、外部機関など様々な人との関わりをもちながら進めてきた取組みについての発表だった。



「活気あふれる学校をめざして」

西藤島小学校 教諭 勝見 義治

生徒指導の愚痴がこぼれる職員室。対して授業の新たな取組みが飛び交う職員室。できれば後者のような活気あふれる学校に通いたい。そんな学校をめざしたマネジメントの取組みの発表だった。

【参加者の声】

- ・管理職ではない教諭の方々が、積極的に改善を考える点がすばらしかったです。もっとみんなで学校マネジメントを意識できたらと思います。
- ・勤務校の分析を全職員で行い、課題を共有することが学校の成長につながると思いました。自校の状況に合わせて取り入れられることがないかと考えてみたいと思います。

② ア

協働探究サイクルが生み出す 子どもの学びをとらえる

～全教科・領域で培う資質・能力～

柳 博恵 / 福井大学教育学部附属義務教育学校

柳本 一休 / 福井大学教育学部附属義務教育学校

【報告】 参加人数 11名

義務教育学校になり3年目。附属小と中という異なる文化をもった2つの学校が一つとなり、学校運営や実践研究を進めていくには多くの課題があったそうだ。時系列に沿って振り返る中で、協働探究カリキュラムの開発に関わる学校や教師の意思決定の実情、課題、改善の道筋を明らかにしていた。これらを共有することによって、本校の変革の経験が、他校の学校づくりに生かされるように研究を進めていきたいとの思いの発表であった。

発表の概要

(1) 子どもの学びをとらえる探究サイクル

① 本校が実践を積み重ねてきた探究サイクルについて研究の概要

- ・本校が実践を積み重ねてきた探究サイクルについて
- ・探究サイクルをもとにした授業づくり及び単元のデザインの実際
- ・OECD Learning Com 2030 との関連

② 探究サイクルを通して培われる力とそのとらえ

- ・子どもが培った力をとらえる枠組みの構築
- ・子どもの語りから培われた力とその背景を明らかにしていく評価方法の開発



(2) 義務教育学校としての歩み

① 学校づくりの時系列に沿った、教師の意思決定の実情、課題、改善の道筋についての分析

- ・研究主題と副題の検討過程について
- ・研究組織と探究サイクルの再編過程及びその実際について

② 学校組織の再編について

(3) 義務教育学校の新たな挑戦

- ・目指す子ども像に「貢献」が加わった意義。義務教育終了時まで、子どもたちが社会貢献に関わる

プロジェクトを協働で立ち上げることは可能か。

- ・全教科・領域で培う資質・能力について

【参加者の声】

- ・生徒が教師と一緒に協働探究サイクルを生み出しているところが、すばらしいと感じました。
- ・働き方改革が叫ばれている中での業務のスリム化と学力向上の取り組みが、これからの参考になりました。

② イ

新科目「歴史総合」「世界史探究」を切り拓く授業開発とシンポジウム

谷口 康治 / 丹生高校

【報告】 参加人数 29名

今年で定年を迎える丹生高校谷口先生が新学習指導要領によって始まる新科目「歴史総合」「世界史探究」の授業のヒントを実践報告した。

講義内容は1つ目が「教師として必要な力とは何か」。グループワークによって先生たちの意見を聞いた後に、新しい社会になっても失ってはいけない〈不易と流行〉について話された。

2つ目の内容が「歴史探究を目指した授業づくり」。谷口先生は授業で実際に生徒自身に〈問い〉を作らせる。その問いについて考えさせることで内容を深めていくことが必要であるということであった。

発表の後半、全員が生徒の立場になり、世界史Aの教科書を使って「バラモン教と仏教」の単元で問いを作る体験を行った。参加者からは「生徒が課題を作ると教師が求める力や知識とずれないか」という質問があったが、「ずれたとしても生徒が作った問いの答えと、本来教えた知識の両方を追うべきである。」という、経験に裏打ちされた力強いご返答であった。

最後に谷口先生は参加者へ、「教員としてだけでなく家族のことや地域のことなど様々な苦労はあるが、皆さんにはきっと助けてくれる仲間がいる。」という素晴らしいメッセージを残された。

定年を迎える谷口先生を慕って多くの先生が参加されたが、新しい教育のヒントを多く学べる発表となった。



【参加者の声】

- ・谷口先生の温かい気持ちにあふれた研究発表でした。授業改革をする必要があることはわかっているのですが、どう具体的に行うのか、勇気をいただきました。
- ・主体的な学び、アクティブラーニングの必要性には十分理解しているものの、普段の授業はどうしても語句の追いかけ、知識の伝達に終始してしまう自分にとって「不易と流行」の「流行」をどう消化すればよいか、手がかりがつかめるようなお話でした。
- ・生徒の問いを前時に聞き本時の授業をつくる、経験、試行、知識の決勝打と感じました。自分もまだまだ研鑽したい、そう思える素晴らしい発表（講演）でした。

② ウ 「自立的な活動」を高校で豊かに展開するために

～通級と学校設定科目の共同実践～

酒井 武裕 ・ 長谷川 浩昭 ・ 澤田 和代 / 大野高校定時制
福田 洋香 / 奥越特別支援学校

【報告】 参加人数 11名

大野高校定時制では、平成28年11月から、通級に関する研究を開始し、平成30年度より自立的な活動を取り入れた「生活と職業Ⅰ」(学校設定)と通級を実施している。発表校の在籍生(H30.5.1現在)は、ASDなどの診断がある30.3%、不登校経験32.1%、見守り・要保護児童17.8%、母語を日本語としない7.1%と何らかの課題を抱えている。また、中学時に特別支援学級や通級などで個別支援を受けていた生徒は35.7%にのぼる。さらに、周囲から強い注意や否定的評価を受けてきたことにより、非・反社会的な行動、特性の強い表出、自己否定感の固着など、行動や心の成長に何らかの影響があったと考えられる生徒もいる。このように本校では通級対象となる生徒は多数いるが、物理的に受講人数を制限せざるを得ないのが現状である。「生活と職業Ⅰ」は、課題を抱えた生徒を一人でも多く、「社会への適応、精神的・経済的に自立に向けた学び」の機会を保障することを目的とし、通級とも連携して行っている。発表校における自立活動の具体的な実践と今後の課題について、以下

(1) から (4) の流れで発表した。

- (1) 「生活と職業Ⅰ」の実践について
- (2) 通級と「生活と職業Ⅰ」の共同実践について
- (3) 授業以外における自立活動や支援について
- (4) 成果と課題、今後の展望

「生活と職業Ⅰ」は、全学年で同じ内容で実施した。異学年が学び合う機会としては有意義であるが、学年に応じた内容も取り入れたい。現在の通級は、特別支援学校の教員に巡回指導で行われているが、将来的には高校教員による指導へ移行すると考えられる。校内においてさらに共有化するなど移行への対応を進めていきたいとの意欲を示していた。

【参加者の声】

- ・高校での、高校の先生方が進める自立活動的な授業について、とても興味深く、お話、資料などもまとめられ、大変わかりやすかったです。もう30分お話を伺いたかったです。
- ・高教研定通部会の発表でもお聞きした内容ということもあり、今回はより深く学ぶことができました。ありがとうございました。酒井先生には個人的にもたくさん教えていただきました。感謝しかありません。
- ・課題設定、生徒に問いを立てさせることは大いに参考になりましたが、それらを教員がどう授業内で評価していくのかをより詳しく聞きたいです。



② 工

教師力向上のための実践研究

～若手自主サークルの取組み～

【報告】 参加人数 11名

「若手自主研究サークルの活動について」

富田 雅人／教育総合研究所

異なる学校の若手教員が集まり、お互いの日々の実践について語り合ったり、県内外の授業研究会や経済界との交流事業などに積極的に参加して知見を広めたりしながら研究を進め、教師力向上を目指していることを紹介。

「やる気・元気・教師力 up de わかてcafé」

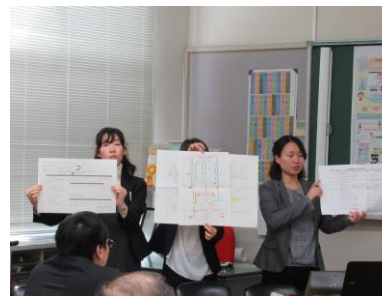
池田 柚衣／清水西小学校 長谷川 侑来／三国中学校 笠原 千裕／三国南小学校

① 1年目、2年目にかけての取組みについて

リフレクションノートを活用して、教科の見方・考え方を意識した授業づくりや、3人の異なった専門性を生かし、授業の事前事後検討会を行ったことを紹介。

② 3年目の取組みについて

1年を見通したねらいの設定とカリキュラムづくりを行ったことや、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業のための指導案づくりをしたこと、そして実際に授業を行った感想を紹介。



「教師力向上のための実践研究～経済同友会との交流を通して～」

三津谷 智士／坂井高校 吉川 誉／武生商業高校 宮崎 素直／敦賀工業高校

① 経済同友会との交流について

会社を訪問し、社長による経営理念についての講話を聞いたり、社内見学やグループディスカッションを行ったことについて写真などを提示しながら紹介。

② 県外職業系高校への視察について

商業科、工業科において、他県へ視察に行った様子を具体的に紹介。



【参加者の声】

- ・教師は児童生徒を社会に出していくにも関わらず、教師自身が社会の流れや会社、経済に疎いということがあるので、経済連とつながり、子どもに還元していく取組みが素晴らしいなと思いました。
- ・若手自主研の活動は報告書を通して数多く触れることができます。しかし、実際に発表を聞く方が10倍よく伝わります。若い先生方が頑張っている姿を見ることができてとても元気をもらいました。
- ・他の研究サークルの活動を見ることができて刺激になりました。今後も継続して活動に取り組みたいと思います。

② オ

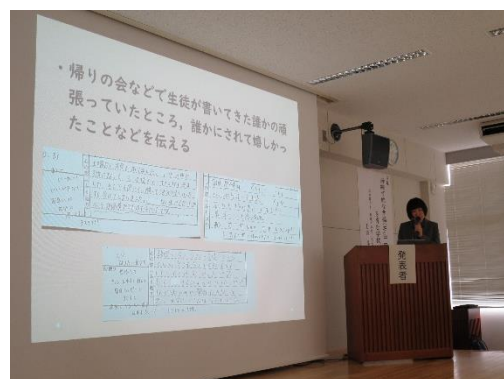
ポジティブな学級づくり

～『強み』をいかして～

後藤 亜好／春江中学校

【報告】 参加人数 41名

学級の中で、気がかりな子どもたちの自己有用感を上げるためには、どのような手立てをしていけばよいかを意識した実践であった。クラス開きからスタートし、学級活動や学校行事など、年間を見通した継続的な取り組みが紹介された。どんな集団においても、自己も他者も認め、受け入れることができるポジティブな人間を育てていきたいという実践者の強い思いが感じられた。



特別研究員の菱田準子教授は、「先生方がポジティブな視点を持つことで、子どもたちの見方が変わる。」「ポジティブ教育のベースにピア・サポートがある。」と話されていた。

〈実践内容〉

① 1学期の実践

- ・私のハート、エゴグラム
- ・1学期のよかったシャワー

② 2学期の実践

- ・学校祭でのピア・サポート活動
- ・強みカードを使った学級活動
- ・赤ちゃん抱っこ体験でのピア・サポート活動
- ・ハーモニーコンサートでのピア・サポート活動
- ・啓発録作成に向けての活動



【参加者の声】

- ・ポジティブになれる環境を整えることや生徒同士の絆づくりを生徒主体で行うことの大切さを学ぶことができました。
- ・年間通して学級を温かく見守るポジティブな先生の取り組みが魅力的でした。
- ・ポジティブ教育を学級経営にどう活かすか具体的な実践を教えていただき参考になりました。

② カ

RST(リーディングスキル) から見た指導法の改善案

飯田 吉則 / 教育総合研究所

【報告】 参加人数 33名

昨年度より本所にて研究しているリーディングスキルテスト(RST)について以下の3点を中心に発表を行った。

- ① リーディングスキルテストの特徴
- ② 昨年度の研究概要
- ③ リーディングスキル向上の方策案

とくに③については、RST受検協力校へのアンケート結果や学力調査との相関分析から次のような方策が提案された。

- ・教科書に使われている定義や学習に用いる言葉(学習用語)の意味理解をする
- ・主語、述語など基本的な文の構造に注意して読ませる
- ・図表を使って考えさせる(イメージ同定)
- ・短文、数、式、資料、実験・観察の意味を説明させる
- ・読み取った情報から作文、立式、図示させる
- ・なぜそうなるのかという理由を説明させたり、本当にそう言えるのかという妥当性を判断させたりする(推論)

参加者は熱心に聞き入っており、発表後には「家庭の言語環境と相関があるのではないか」、「教師のRS向上も考えていく必要がある」といった意見が出た。

終了後も残って発表者に質問する参加者がいるなど、関心の高さがうかがえた。



【参加者の声】

- ・RSTと全国学調の相関からの授業改善という切り口が非常に面白く感じました。数値結果から見られる英語との相関関係や、読書との相関があまりないという話など興味深かったです。
- ・本市でも2月末に教員対象にRSTを実施するので、特に授業において大切にポイントについて、本市の研修でも参考にしたいと思いました。読書との関係性については驚きました。楽しく聞かせていただきました。
- ・とても面白い興味深い内容でした。クラウドファンディング等も利用し、ぜひ継続研究し、本当の意味での福井スタンダードにしてほしいと思います。
- ・様々なデータを元に丁寧にご説明くださりありがとうございました。試行錯誤の中、今まで指導してきたことはあながちまちがいではなかったと自信が持てます。

② キ

高校数学

「数学的活動を通して、知識・技能を身に付け、

主体的・協働的に学ぶ生徒を育てる授業研究」

谷山 潤也 五十畑 直 岡部 孝行 / 教育総合研究所

【報告】 参加人数 27名

1) 高校数学授業改善グループの今年度の活動報告

- ・高教研数学部会とタイアップして行った本活動の趣旨や方法
- ・研究所の研修講座の利用や授業参観時の生徒の様子の見取りの工夫
- ・今年度の活動から見えてきた今後の課題

2) 授業者や研究協力員の先生方による報告

授業者：研究所のサポートはとても助かった。生徒のモチベーションが高まる工夫を考え、指導案の検討を重ねた。

研究協力員：メールを用いての検討は自分の都合に合わせてできるのは良いが、いろんな意見があったことや意図がわかりにくいなどの難しさもあった。

研究協力員：授業で、同じ生徒の活動を見ることで教員の指導・問いかけに対してどんな反応をしているのかが非常によくわかった。意外なことを考えていて、活発に活動しているのがわかった。

授業者：生徒の考えや様子を記録してもらうことで、授業者には拾えなかった部分が見え、目標が達成できていたかを捉えることができ、今後の授業に反映させることができた。

3) グループ協議

①授業研究の現状

- ・こういう場がないと普段はなかなか難しい。
- ・教材を共有している学校もある。
- ・教員の横の繋がりががあると良い。
- ・個人レベルでは相談や検討を行うことは多い。
- ・学力向上について話し合われることが多い。

②職場を超えて学び合う方法

- ・その学校のイメージがつかめないと指導案にコメントしにくい。
- ・高校でも近隣校で集まって検討会を行うと良い。
- ・指導案が分類に分けられ共有・活用できるようになると良い。



【参加者の声】

- ・職場を越えた学び合いは良いと思った反面、校内での研究をもっと充実させないといけなと感じました。
- ・各学校の現状や実践報告を聞くことができて良かった。職場を越えた教員同士の学び合いが大切であり、そのためには今回のような研修会に参加することが欠かせないと感じました。
- ・各校の先生方の現状や問題と考えている点などを聞いたことも参考にしたいと思います。他校の教員との協議ができる場が定期的にあると良いと思いました。



② ク

中学校における学校マネジメント

～学校組織マネジメントにむけた

カリキュラム・マネジメントの実践～

森田 史生／教育総合研究所

【報告】 参加人数 25名

『越廼 PR』を持続的な取組にするためには

越廼中学校 教諭 向井 敏幸

「越廼 PR」は、4年前より越廼中学校が地域と共に行っている核となる活動である。この活動は過疎地域の教育モデルとなる実践として内閣府から表彰を受けている。だが、教員の異動や生徒数の減少にともない、継続が難しくなっている。学校文化となった「越廼 PR」を今後も継承・発展させるためには、「問い」とマネジメントによって、効果的な「人」と「人」との結びつきを生むことが重要である。

「中学校から地域を元気にしていくためのマネジメント」

勝山北部中学校 教諭 廣田 大吾

各教科や「特別の教科 道徳」で対話的な学習に力を入れ、互見授業や道徳授業を協働で取り組むことを通して、生徒に学力が定着し、職員間に活力が生まれ、さらに学校が元気になった。この元気を「北中まちづくりプロジェクト」に生かし、多くの人に勝山のよさを発信し、活動の輪を広げていくために、つながりを意識した取組をしている。

「ふるさと地域学習を通じたマネジメント」

丸岡南中学校 教諭 梶岡 敏治

総合的な学習の時間に3年計画で「ふるさと地域学習」を行っている。現2年生は、1年生の頃から「実現したい丸岡の未来～50年後を想定して～」というテーマで、ふるさと活性化のために丸岡城の国宝化に向けて何が必要か、どのようなまちづくりをしていけばよいかについての学習を進めてきた。学年主任として、ヒト、情報、時間、資源などをマネジメントしてきた。



【参加者の声】

- ・学校マネジメントの視点での各校の取組みがよくわかりました。今の校務分掌上のできる具体的実践がよかったです。
- ・各発表とも地域の人材、資源を上手に生かして、それぞれの特性を組み合わせていたと感じました。
- ・同じ中学校教員として、地域行事参加やPRなどが参考になりました。

②ケ

高校における学校マネジメント

～学校組織マネジメントにむけた
カリキュラム・マネジメントの実践～

福田 浩之／教育総合研究所

【報告】 参加人数 13名

「マネジメント研修」の概要

福井県教育総合研究所 福田 浩之

マネジメント研修は、中堅教諭等が管理職を目指す上で必要な資質や能力を高めることを目的としている。具体的には「学校組織マネジメント研修」と「カリキュラム・マネジメント研修」を実施している。集合型研修を2回実施した後に、各校の校務分掌、教科等で実践を行う。実践では、実践途中に遠隔システムを用いて、各校の管理職、福井大学教職大学院教員、教育政策課参事等からアドバイスを受け、レポートを提出する。今回では、2つの実践発表を行った。

「カリキュラム・マネジメントの視点に立った学びの更なる充実」

金津高等学校 教諭 西東 一彦

新学習指導要領で示されたカリキュラム・マネジメントの視点に立ち、学校全体で取り組んだ実践についての発表だった。

1. 教科等横断的な視点に立った「社会に開かれた教育課程」の編成と実施
2. 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善
3. 学びの更なる充実を目指した組織づくり

社会に開かれた教育課程実現のために、社会とのつながりを意識したカリキュラム・マネジメントや授業改善の推進が必要である。



「多くの方を巻き込んだ学校の活性化」

大野高等学校 教諭 石田 昌也

校内の教職員全員にアンケート・座談会を設定し、「学校のめざすべき方向性・育てたい生徒」の共通理解を図った。

1. 「自主性を育てる」という目標のもと生徒の勉強会講座を実施
2. 外部機関と連携
・探究分野（福井大学、福井経済同友会）
・大野市模擬議会（大野市議会、議会事務局）

教師が自主性を持つことが生徒の自主性を生むと感じた。教員は理想・想いを持って仕事に取り組んでいるので、誰かが旗振り役をすることで教師集団が「One Team」になることができると感じた。



【参加者の声】

- ・教科横断的な視点に立った「社会に開かれた教育課程」の実践は、様々な観点があり、参考になりました。
- ・座談会を通して学校の課題を取り上げ、教員が力を合わせて取り組む実践が印象的でした。カリキュラム・マネジメントは難しいですが、取り組んでみようと思いました。

ポスターセッション

11:15～12:10 自治研修所大研修室

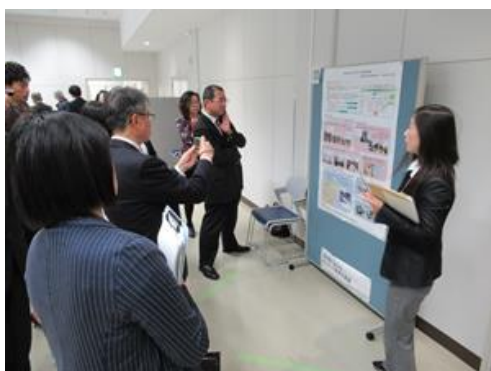
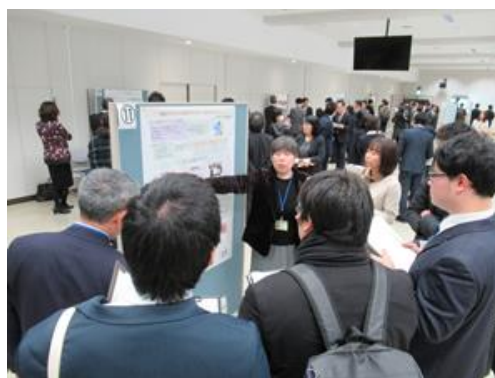
【報告】

全14のポスター発表に約120名の方が参加してくださいました。カリキュラム開発からプロジェクト型学習の実践発表まで幅広いテーマで発表がなされ、大変有意義な時間であったとの声が多く聞かれました。

学校等から4点、学校と研究所とのコラボ発表が1点、研究所から9点の全14のポスターが集まり、15分程度のセッションを3回実施しました。約120名の方が参加して下さり大盛況でした。

今回は、嶺南教育事務所からの発表があったり、プロジェクターや実物を用いた発表を行ったりするなど新しい取組みにも挑戦し、参加者からはとても良い評価をいただくことができました。

発表を聞いた後、熱心に質問している風景があらこちらで見ることができました。特に、教育相談関係のポスターや県外からの派遣研修の先生方からのポスターが好評だったようです。



【参加者の声】

- ・ 質問の時間を確保していただき貴重な情報が得られた。どのテーマも興味深いものでした。
- ・ プロジェクターを使うなど、もう今やポスター形式でないのが、とても興味深かったです。
- ・ 学校と研究所が協力した取組みを聞いてよかったです。
- ・ 学校サポートプログラムについて、とても参考になった。本県でも学級支援のあり方について再考する時期にきているのでヒントにしたいと思います。
- ・ 道徳について知りたいことが沢山あったので、自分の学校にも研究所の先生に来ていただきたいと思いました。
- ・ (県外からの派遣研修発表について) 力が入っている、よく考えてあると思いました。何年目かに入っているので「福井のここを工夫したい」を次回ぜひお願いしたいと思います。

【講演会】

持続可能な幸福 (Well-being) を 育む学校づくり

立命館大学教職大学院教授 菱田準子 氏

【報告】 参加人数 200名

教育総合研究所の特別研究員である菱田準子教授が、「持続可能な幸福 (Well-being) を育む学校づくり」と題して教育相談センターで特別研究として行っているポジティブ教育について講演した。

菱田教授は、「ポジティブ教育は、人生を最も価値あるものにするための教育」とし、そのために子どもたちが「幸福な人生を自ら創ることができるための力」を地域全体で育むことが大切であるとして具体的な行動の指標を「THRIVE」という表で示した。また、「勇気・感謝・ゆるし・思いやり・喜び」からなる「5大栄養素」と「自己の気づき」や「自己コントロール」等を学ぶレジリエンス教育を学ぶポジティブ授業を、昨年度からの研究協力地域である池田町の幼小中での実践を紹介しながら、説明した。「人生を最も価値あるものにするための教育」には「正解」はないとして、自分たち大人が自分の人生を価値ある人生にしていく生き方が問われていると参加者に語った。

講演会には県内外から200名を超える教育関係者が参加し、子どもたちの未来を創る教師という仕事について、子どもたちの幸福を育む場としての学校について、自分自身の生き方について改めて考える機会となったようで、アンケートには菱田教授の講演内容に共感したという多くの感想が書かれていた。



【参加者の声】

- ・教育とは何？と改めて考え、学ばせていただいた講演会でした。ポジティブ教育、正解に捕らわれていませんか？という問いに心打たれた一言、さらに歌で答えを出すことができたと思います。少し悩んでいたものが払拭できました。児童生徒の心を育成する力、感謝、前向きに育てる想いなど今後大切にしていきたいと思います。
- ・池田町での取り組みが素晴らしい。今（今週から直面している問題）があって、それに対するヒントを得られたように思います。今の生徒の中には、本当にコミュニケーションがうまくとれない子どもたちが多くいます。出てくる言葉はネガティブなものが多いです。それによって友だちとつながっているように思います。ポジティブにうまく転換できるといいと思います。ながら聴かせていただきました。
- ・とても心に残るいいお話で最後まで集中し、自分を振り返りながら聞きました。「予測困難な」といわれると不安な時代が訪れそうな感覚に陥りそうですが、我々教員は予測困難な時代の未来は明るいもので、そんな時代に君たちは生き、社会をつくってほしいというメッセージを送ることが大切だと思います。

自由見学・展示

自治研修所 大研修室図書コーナー

教育総合研究所 大講義室中・前

【報告】

各センターから資料や取組に関するポスターなどを
展示し、多くの方が昼食休憩中に見学していました。

展示内容は以下の通りです。

<教科研究センターより>

- SASA関連資料
- 課題解決学習の実践（高校の県内モデル校12校）のポスター

<教職研修センターより>

- 研修に関するポスター
教科別研修講座、遠隔システムを用いた研修、マネジメント研修、教員志望者セミナー
教員免許更新講習、中堅教諭等資質向上研修
- 通信型研修動画（昼食・休憩時間に大講義室で上映）

<教育相談センターより>

- ポジティブ教育の概観
（「PERMAモデル」、「THRIVE」の指標、「五大栄養素」、レジリエンス教育の概要、プログラムの概観と内容、強みカードなど）
- 福井県適応指導教室の取組
福井県適応指導教室の活動状況と、地域の教育支援センターとしての特色ある取組み
- 30分のできるケース会議（ブリーフミーティング）の紹介



博物館見学

12:50～13:35

【報告】

教育博物館の見学には、約 30 名の参加がありました。今年度は唱歌・童謡に関する特別展を開催中であり、多くの参加者から大変興味深い内容だったとの声がありました。

また以前来館された方からも、常設展の展示内容が充実しているとの声が聞かれました。



<特別展示>

○博物館廊下・多目的室

「日本画を活用した美術教育」児童生徒作品展

本県で行われている、日本画を活用した芸術教育推進事業の実践として、子ども達の日本画作品を展示しています。（主催：福井県教育庁義務教育課）

○展示室C・展示室E

時を超えて出逢う唱歌と童謡～懐かしの音楽教科書～

音楽の教科書に掲載され続けている唱歌や童謡をご紹介します。あわせて学校音楽教育の変遷についても展示しています。

